

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日のをか

与謝野 晶子

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる

斎藤 茂吉

石がけに子ども七人こしかけてふぐをつりをリ夕焼け小焼け

北原 白秋

校塔にはと多き日や卒業す

中村 草田男

日焼け顔見合ひてうまし氷水

水原 秋桜子

赤とんぼ筑波に雲もなかりけり

正岡 子規

スケートのひもむすぶ間もはやりつつ

山口 誓子

中学校で学ぶ主な短歌と俳句 (光村図書二年・三年 より)

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まらずただよふ

若山 牧水

街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る

木下 利玄

みづからの光のごとき明るさをささげて咲けりくれなゐの薔薇

佐藤 佐太郎

轉をこぼさじと抱く大樹かな

星野 立子

雀らも海かけて飛べ吹流し

石田 波郷

をりとりてはらりとおもきすすきかな

飯田 蛇笏

高等学校で学ぶ主な短歌と俳句 (「国語I」採録の主な作品より)

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはず天に聞ゆる

斎藤 茂吉

隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり

島木 赤彦

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

石川 啄木

花を買ひ来て

釈 迢空

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

寺山 修司

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

生徒は小学校六年の段階で短歌・俳句を学んでいるが、授業では限られた作品にしか触れることはできないので、まず生徒が短歌や俳句に興味をもつことができるように配慮する必要がある。

たとえば、正岡子規という名前は知らなくても、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」という俳句は一度は聞いたことがあるだろうし、芭蕉の作品の中からいくつかの有名な句を朗読することにより、興味・関心を喚起することもできる。

また、短歌に関しては、俵万智などの作品が中学校だけでなく、高校「国語I」の教科書にも採録されている。身近な題材をもとに自分自身で創作しようという意欲を高めることも可能である。

大切なことは、短歌・俳句の基本知識(句切れ、修辞技法、季語、切れ字等)を確かなものにするとともに、何回も繰り返し味わうことにより、作者の感動を共感的にとらえることができるよう支援することである。

◆短歌について◆
○問いかけによる理解
たとえば若山牧水の作品に関しては、白と青の清爽な対照に、周りの色に染まらない純粹な孤高のイメージをとらえさ

せたり、「や」と「か」との比較を通して「白鳥」に共感を寄せていることを感じとらせることも可能である。その際、生徒自身の疑問をもとに授業を組み立てることも効果的である。

佐藤佐太郎の短歌に関しては、「みづからの光のごとき明るさ」の意味するものを考えさせるとともに、「ささげて」の表現が何を表しているかをグループで考えさせる。

また、倒置法や擬人法などの修辞技法に着目させるとともに、音読により読みを深めることが大切である。

◆俳句について◆
○季節感、時間感覚、生命感
星野立子の句では、切れ字「かな」に着目させるとともに、修辞技法の説明を通して擬人法を用いた作者の意図を読み取らせる。

また、「こぼす」という日常的で平易な語に着目して、作品の鑑賞を深めることもできる。「こぼさじ」にあるのはついつい思わずももらすまいとする細心の配慮であろう。

○助詞及び表記の工夫
助詞「も」の役割は俳句において重要な意味を持つ。石田波郷の句では、「雀らも」「吹流しも」そして「子供らも」と

考えられる。また、「飛べ」という表現が込められた顔の